

令和元年6月19日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02795

研究課題名(和文) 英語は原則英語で教授すべきか-学習動機・英語会話意欲に与える影響-

研究課題名(英文) Effects of teaching English in English on the development of motivation and willingness to communicate

研究代表者

古賀 功 (Koga, Tsutomu)

東海大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：90528754

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：指導言語の違いが学習者の動機・会話要因に影響を与えることは少ないという結果が得られた。しかし、英語で教授することは学習者に頻繁に英語に触れ、使用する機会を与えることができ、また比較的英語熟達度の高い学生にとっては、all Englishの環境が適切であると考えている点から、日本語の使用は極力避けるべきである。いつ日本語を使用すべきかという点に関しては、活動やテストの指示と単語や文法説明をする際に、その使用は推奨される。まとめとして、日本語と英語での間に差がなかったという結果は決して無意味なわけではなく、反対にマイナスの効果がないということは英語で行ってもよいということを示唆している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語の授業は原則英語で教授するという方法は、学習者の動機づけや英語で会話する意欲の向上という観点からはあまり良い効果は見られなかった。しかし、この教授方法が決してマイナスの効果を示したわけではなく、英語を実際に使用できる場所や英語に触れられる場所を提供できたことは事実である。本研究協力者は、指示の確認や単語・文法説明など複雑かつ重要な事項に関しては特に日本語での説明を望んでいた。いつ、どのような状況で教師が日本語を使用すべきかを検証することは今後の課題ではあるが、本課題では、英語・日本語で教授するというよりはむしろ、動機づけや会話意欲に影響を強く与える要因がほかにあるということが判明した。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this project is to examine the effects of teaching English in English on the development of learner motivation and willingness to communicate (WTC) in English. The results showed that those who were taught English in Japanese developed their levels of WTC, whereas those taught in English did not demonstrate such a development. However, the latter students more often used English in a given task than the former. As for more advanced learners, native English speaking teachers contributed to the enhancement of their students' WTC, and the frequent use of Japanese caused the decrease of it. Although the studies did not indicate significant changes in motivation and WTC in the all-English-environment, these results did not mean negative. Rather, I suggest English should be taught in English with the minimum use of Japanese since it provides more opportunities for students to be exposed to English and use it in class.

研究分野：英語教育学

キーワード：英語を英語で教授する 英語学習動機 英語会話意欲 個人内要因 英語教授法

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 学習指導要領の改訂により、高校の授業は原則英語で行うことになっており、また中学校でもこの方針が拡張されることも決定していた。研究開始当初は英語を英語で教授する効果の検証は日本の英語教育の研究ではあまりされていなかったため、その効果を学習者の学習動機と会話意欲・自信に着目し、研究を開始した。

(2) さらに、コミュニケーション能力の育成が強調されていたので、いかに自律した英語使用者を育成できるかは広く議論されていた。その際に動機付け研究で注目されていた理想の自己という概念を取り入れ、会話意欲や内発的動機づけとの関係を調査する必要がある。理想の自己とは「将来英語を使用している自分を想像する」などといった考えで、この自己が何によって刺激されるかは当初は研究されていなかった。

2. 研究の目的

(1) 英語を原則英語で教授する際、学習者にどのような影響を与えるかを調査することが本課題の目的であった。特にそのような教授法に慣れ親しんでいない日本人学習者にとっては、英語学習に大きな不安を感じ、結果学習動機やコミュニケーションを取ろうという意欲も低下してしまうのではないかと考えられた。よって、教師が英語のみ使用する教室環境で、学習者の個人内要因がどのように変化していくかを調査した。

(2) また、もう一つの目的は教員の国籍と指導言語の影響を調査することであった。英語母語話者が授業で英語のみを使用することは自然な事であり、学習者もこれを受け入れることは比較的容易であると考えられる。しかし日本人教師が英語を使用することは、学習者にとって「自分も勉強すると先生のように英語を話せるようになるかもしれない」といった、ポジティブな感情が生まれる可能性がある。よって、英語母語話者の教師と日本人教師との比較も考慮に入れ、調査することとなった。

3. 研究の方法

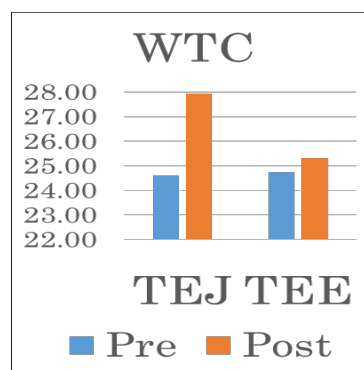
(1) 始めに、1学期の授業(16回)で学習者の動機・会話要因がどのように変動していくかを検証するために、同じ日本人教員が1つのグループには日本語主体で授業を行い、もう一つのグループにはすべて英語で授業を実施した。その際、授業内容、教科書、シラバス、活動、テスト、課題といった全てのものを統一し、違いは指導言語のみになるよう調整した。学習者の個人内要因を学期の最初と最後に質問紙によって測定し、その変動を量的に検証した。さらに英語の自主的な使用を促すためにグループ内で発表する課題を与え、その活動時の学習者の姿勢を検証するために、自由記述の質問紙も実施し、それを質的に分析した。

(2) 1学期の授業(30回)で英語熟達度の比較の高い学習者の動機・会話要因がどのように変動するかを調査した。英語母語話者の教員3名と日本人教員3名の授業を対象にした。統一カリキュラムであったため、シラバス、授業で使用する教科書、2回のライティング課題、リーディングテストなど授業で達成する目的は同じであった。しかし、授業で行う活動やフィードバックなどは制限することができず、授業要因は異なっていた。学期の最初と最後に質問紙によって会話意欲・自信、自己システム、内発的動機を調査し、さらに教員の英語使用に関する質問も用意した。この質問の回答を基に6クラスをすべて英語で授業を行ったクラス(英語母語話者の教員)、ほぼ英語で授業を行ったクラス(日本人教員2名)、日本語を頻繁に使用して授業を行ったクラス(日本人教員1名)に分け、3つの条件のもと学習者の動機要因と会話要因の変化を分析した。

4. 研究成果

(1) 日本人学習者の全体的傾向として、英語を話す有能感は非常に低い。これは日本人の性格とも深くかかわっている可能性が高く、これが会話不安を高めてしまっている。この2つの要因は会話意欲に直接影響を与える要因であったため、いかにこの会話に対する自信(有能感が高く不安が低い状態)を高めるかが課題である。本課題で着目した指導言語(英語か日本語か)に関していえば、学習者の自信を高める要因ではなかったが、以前の研究結果から協働活動やコミュニケーション活動の重要性が挙げられる。

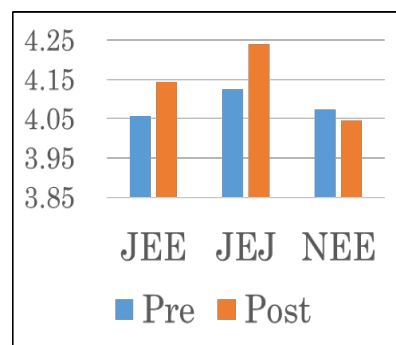
(2) すべて英語で行った授業と日本語で行った授業を比較した際、両グループとも会話に対する有能感と会話不安は変化しておらず、会話意欲(willingness to communicate: WTC)は向上していた。グループ間の違いは、日本語で行った授業(TEJ)の学生のWTCは高まり(右表参照: WTCの変化)、不安は低下する傾向であったが、一方英語で行った授業(TEE)の学生は不安がやや高まっていた。英語を英語で行う授業においては、学生は英語を使用しなければならないというプレッシャーを与えられてしまうが、日本語で行う授業では学生自身がどちらの言語を使用するかを選択がより与えられ、さらに英語を使ってみようと思うときに英語で会話することが可能であったため、WTCにも良い影響を与えていたと示唆された。



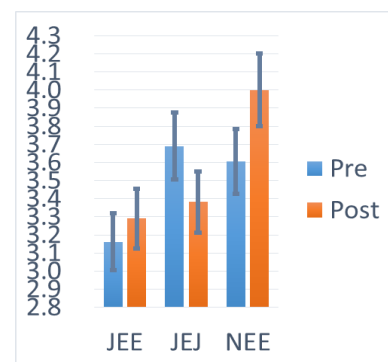
(3) 質問紙の自由記述の回答から学生の英語使用に関してより質的に分析した。グループプレゼンテーション活動の前に、学生に英語でも日本語でもどちらで発表しても良いという選択を与え、どの程度活動内で英語を使用したかを調査した結果、英語グループの方が日本語グループよりもより英語を話していた。英語グループでは約3分の2がほぼ英語を話し、日本語グループでは約3分の2の学生がほぼ日本語で発表を行っていた。詳細な分析でわかったことは、英語グループが日本語を使用した理由として、聞いている学生が発表についてきているか、理解できているかを確認するためであり、また補足説明などを日本語で行っていた。聞き手の英語力が限られている中でこの日本語の使用は仕方がない事であり、もし聞き手の英語力が高かったならば日本語を話す必要は無かったことが示唆される。英語を英語で教授すると学生に英語の使用を促す効果は得られた。

(4) 指導言語が学習者の WTC や会話自信に与える影響は限られていたが、実際の使用には効果を与えていた。英語環境では学生の不安が高まると危惧されているが、英語グループの不安の向上は微々たるものであり、大きな問題にはならないと考えられる。それよりも、学生が英語を積極的に使うことができる環境が増えることで、自信は高まっていくと推測されるため、原則英語で教授することは効果があったと考えられる。

(5) 日本人教員が英語で授業を行うことは、学習者も「先生のように英語が話せるようになったらな」といった理想の自己を刺激する良いモデルとして働くのではないかという仮説を検証するために、以下の3つのグループを比較したが、理想の自己に関しては変化を見せなかった：英語母語話者が英語で授業を行う (NEE)、日本人教員が英語で授業を行う (JEE)、日本人教員が日本語を頻繁に使用して授業を行う (JEJ)。しかしながら、興味深い点は有意な変化とは言えなかったが、日本人教員の両グループ (JEE と JEJ) では理想の自己が高まっており、反対に英語母語教員のグループ (NEE) では低下していた (右表参照：理想の自己の変化)。解釈としては、調査協力者の動機要因や英語熟達度がすでに比較的に高く、それらを更に向上させることは困難であると考えられる。先行研究などでも、動機要因が低い学習者をより動機づけることができるという報告は多々見られるものの、動機が高い学習者はそのレベルを維持すると報告されており、本研究も同様な結果が見られた。しかし、すでに動機が高いからといって教師の介入が必要でないという結論にはならないため、特にこのような学習者を対象とする調査が今後の課題となる。



(6) 上記(5)と関連して、その3つの条件で学生の会話する意欲 (WTC) と自信の変動も分析した。結果、英語母語教員が教授していた学生たち (NEE) のみ、WTC の向上が見られた。熟達度の高い学習者は、英語母語話者と英語でコミュニケーションを取りたいと考える事も自然な事である。一方、日本人教員が英語 (JEE) で授業すると WTC が向上する傾向になったが、その向上度合いは低かった。また、授業で日本語を頻繁に使用 (JEJ) してしまうと WTC は低下する傾向にあった (右表参照：会話意欲 (WTC) の変動)。この結果から、やはり動機・会話要因と熟達度の高い学生にはより挑戦的な環境を作り上げ、その中で英語に接する機会を増やし (インプットの増加) 積極的にコミュニケーションが取れる機会を与える (アウトプットの増加) ことが大切であることが判明した。



(7) 内発的動機に関しても、どのような状況下でも有意な変動は見せなかった。しかし、全体的に要因の変化を見た際には、動機・会話要因は向上していた。つまり、本研究の協力者は学期が始まる前よりも学期の終わりの方が、より動機づけられ英語で会話する意欲はあったと考えられる。

(8) 最後に学生から得られた自由記述の回答を質的に分析した結果 (KH Code で行った) 最も頻繁に使用されていた単語は「英語」というものであり、3 番目に頻出した単語は「楽しい」であった。例えば、「英語に触れる機会が多くて良かった」、「自分自身の英語の向上につながった」、「英語のスキルを高めるのにとっても良い授業だったと思う」などといったようにポジティブに使われていた。さらに、ある単語がほかの単語とどのように現れてきていたかを見てみたところ (クラスター分析で行った) 「楽しい」、「授業」、「教員」という語と一緒に現れており、さらに「学生」と「教師」という語の使用を見てみると、「学生の意見を尊重していた」、「生徒と先生が協力して授業を作っていく点がとても良かった」、「丁寧に説明してくれてとても分かりやすかったです」といったように、本課題の協力者たちは授業や担当教員に対して満足していたことが分かった。しかし、学生の回答からは、会話に対する意欲と自信や理想の自己に関するコメントはほとんど見つからなかった。

(9) 英語母語教員の授業における英語の使用率に関して適切であると考えている学生は多く見られ、さらに教室内で教員が日本語を使用する必要がないと感じていた。同様に日本人教員

が英語で教授したグループの学生もその使用率を比較的に適切であると感じている一方、日本語も教室内では使用される方がよいと考えている傾向が見られた。これは母語を共有しているならば、必要な際には日本語で説明したほうが効率的であると学生は認識していることを示している。「どのような状況で日本語は使用されるべきか」という回答を分析した結果、3つのグループに共通して以下大きく分けて2つの状況が見つかった。1つは、活動・テスト・課題などの指示は日本語を使用する。指示がわからなければ、何もできないという理由だと考えられる。もう1つは、語彙や文法説明はその複雑性や効率化のために日本語でされるべきであると学生は報告していた。頻繁に日本語を使用する必要は無いものの、このような状況下で積極的に使用すると、学生はより授業に対して満足する可能性が示唆されている。

(10)最後に本課題を通して議論された「原則英語は英語で教授するべきか」に対する答えとして、動機づけ・会話要因の観点から「すべきである」と提案したい。始めに、指導言語は学習者の動機や会話意欲といった要因にプラスの影響もマイナスの影響も与えることはないことが判明した。全体的に有意ではないが学期初めよりも学期後の方がそれらの要因が向上していたことを考慮に入れ、さらに英語で教授することは限られた教室内・授業時間内で多量なインプットを提供することができるという利点を考えると、やはり日本語の使用は上記で挙げた2つの状況下でのみの必要最小限にした方がよいと提案する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計12件)

Konno, K., Koga, T., & Sato, R. (2018). Examining the role of perceived relatedness in on-task behavior during an interactive task. Oral presentation at 2018 Applied Linguistics Association of Korea, Sogang University, Seoul, South Korea, (October 13th, 2018)

Koga, T., & Konno, K. (2018). Revisiting Motivational Profiles of Japanese EFL Learners. 第44回全国英語教育学会京都大会(平成30年8月26日龍谷大学)

Konno, K., Koga, T., Sato, R., and Leis, A. (2018). Fostering learners' willingness to communicate in Japanese contexts. Symposium at 16th Asia TEFL International Conference, University of Macau, Macau SAR, China, (June 27th, 2018)

Koga, T., Konno, K., & Sato, R. (2017). Variations in L2 Self and WTC: Effects of Teachers' Nationality and Instructional Languages. Oral presentation at the 1st International Conference on New Trends in English Language Teaching and Testing, Dubai, UAE, (August 24th, 2017)

Koga, T., Konno, K., & Sato, R. (2017). Roles of Japanese Teachers and Native Teachers in the Classroom: Changes in L2 Self. 第43回全国英語教育学会島根大会(平成29年8月19日島根大学)

Koga, T., & Sato, R. (2016). Teaching English in English or in Japanese: Effects of Instructional Languages on Development of Communication Variables. 第42回全国英語教育学会東京大会(平成28年8月21日獨協大学)

Sato, R., Kasahara, K., Koga, T., & Konno, K. (2016). Suggestions for conducting Hybrid PPP lessons. Symposium at the 14th Asia TEFL International Conference, The Far Eastern Federal University, Vladivostok, Russia, (July 1st, 2016)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：佐藤 臨太郎

ローマ字氏名：Sato Rintaro

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。